

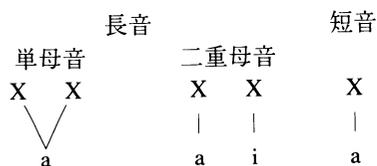
ウェールズ語の重音節化現象について

三宅正隆

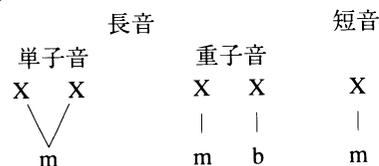
1. はじめに

音の長短は、強勢や音調と同じように個々の音の固有の特性というより他の要素との相対的な関係においてとらえられるべき特性である。SPE¹⁾をはじめとする標準モデルでは、強勢や分節素の長短は他の [voice] や [high] など分節素固有の特徴と同じように、[long] という素性によって分節素を構成する素性の一つとしてとらえられていた。一方、非線的理論であるオートセグメンタル理論が提案されて以来、音の長さは分節素の素性から独立して音韻的時間（タイミング）を表す単位としてのスロットで表示されるようになった。この表示方法では母音、子音の量的な長さの違いは次のように示される。

(1) a. 母音



b. 子音



長短にかかわる現象として最も顕著なものはいわゆる代償長音化 (compensatory lengthening) 現象で、これは長さの単位が他の音素素性と独立して考えられるべきであるとする有力な根拠と考えられ、(1) のような表示の妥当性を支持する有力な例の一つである。これ以外の長短にかかわる現象としては強勢にともなう長音化や、音節構造の種類にかかわる開音節長音化や音節構造の種類にかかわる開音節長音化、さらには有声/無声という音素の特定の素性を条件としたもの等が伝統的に認められている。これらは別の見方からすれば、対立に関わる音素的なものと同非対立的な異音的なものとしてもとらえることができる一方で、語彙的 (lexical) なものと後語彙的 (postlexical) なものとの違いとしてもとらえることができるものである。

英語では長短は母音の質的な違いにともなう余剰的な特徴として考えられるが、環境による違いもある。この典型的な例は有声子音と無声子音の前にかかる母音の長短の違いである。このよ

うな環境による違いはもちろん異音的な違いであるが、音素設定上の問題点としてしばしば指摘されてきたように、母音の長音化が音声学的条件による現象でありながら中和現象などともなっていて、結果的には「示差的」な機能をにうような場合もある。英語での典型的な例としては、特にアメリカ英語に多く見られる有声子音に先行する母音の長音化現象に関わるものがある。例えば /bæt/ 'bat', /bæd/ 'bad' や /ráytr/ 'writer', /ráydr/ 'rider' などの語では、長音化に続いて後続の子音の無声化や弾音化が起ると各ペアーの相違が母音の相違だけになってしまう。²⁾

(2) a.	/bæt/	/bæd/	
	—	æ:	長音化規則
	—	t	無声化規則
	[bæt]	[bæ:t]	
b.	/ráytr/	/ráydr/	
	—	a:	長音化規則
	D	D	弾音化規則
	[ráyDr]	[ráyDr]	

ウェールズ語においても母音の長短は示差的な機能をはたすものと、環境によって予測可能なものがある³⁾。一般には母音の長短は音素上の違いとして考えられているが、以下でみるように、対立的に現れる長母音の環境は非常に限られるので、基底では短母音のみを認める分析が妥当である。以下この小論ではウェールズ語の長音化現象は基本的には強勢付与に伴う重音節化現象で、この自然な説明のためには音節の概念を用いてオートセグメンタルな分析法をとる必要のあることを示したい。

2 ウェールズ語の音素

ウェールズ語の発音は概ねつづり字と一致し、次のような音素からなる。⁴⁾

(3) 子音: p, t, k, b, d, g, f, θ, s, ʃ, j, χ, h, v, ð, m, n, ŋ, l, r

短母音: i, ɔ, e, ɔ, a, ə

長母音: i:, u:, e:, o:, a:

二重母音: ey, ay, ɔy, ɔy, iw, ew, aw, ow, əw

これは主に南部で使われる方言に見られるもので、北部方言ではこれに中舌母音 /ɹ, ɹ/ が加わる。ウェールズ語では南北の地方差によって音素だけでなく音韻現象についても若干の違いがみられる。この方言の違いについては随時言及することにする。

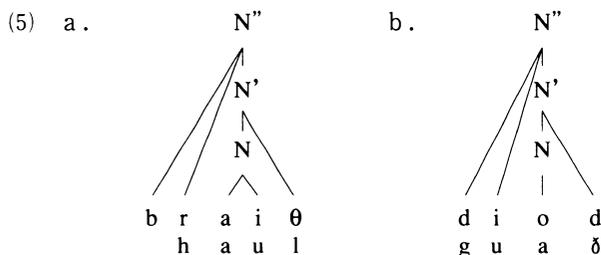
(3)にあげたように母音は長短の区別の他に質的な違いがみられる。⁵⁾ 音の長さと言質（張り性）とは互いに余剰的な特徴であるとも考えられることから、一般には量的な区別のみ [:] の記号を用いて示されることが多いが、質的な違いのみを示す学者もいる。

ただしウェールズ語では環境によってはこの2系列の母音が異音として現れたり、また自由変異となることもある。相補分布をなす典型的な環境は、語尾から2番目の音節で中舌母音が語末の母音の高さによって張り母音となったり緩み母音となったりする場合である。

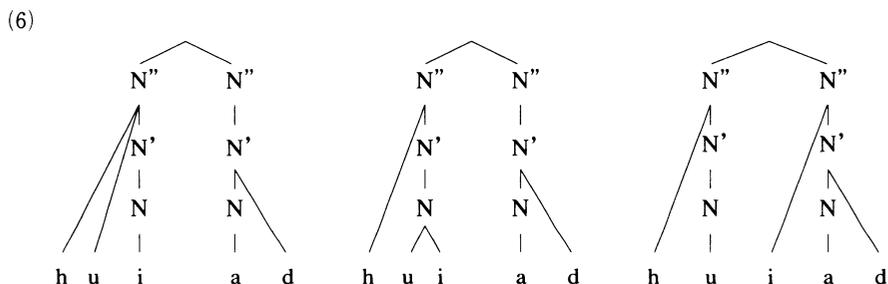
- (4) a. *té:big* 'alike' *gó:vin* 'to ask'
 mé:ðul 'to think' *gó:lug* 'appearance'
 b. *áde* 'thred' *ó:ged* 'harrow'
 sá:bôn 'soap' *kó:la* 'barley awn'

(4 a) の例は最終音節の母音が高母音であれば penultimate の [-high, -low] の素性指定を持つ母音は長母音でも音質は緩み母音であるが、一方 (5 b) の例では最終音節の母音が、中、低音の場合で、これは短母音ながら張り母音で、結局これらは相補分布をなすことがわかる。

ウェールズ語の二重母音は [ey] [ow] の場合のみ核に張り母音が現れ、その他の場合は緩み母音が音節核の位置を占める。ウェールズ語の渡り母音 [y] [w] はつづりではそれぞれ i/u/y と w があてられるが、これらは渡り音と同時にそれぞれ高母音 [i] [i:] と [u] [u:] もあらわすので、つづり字からだけでは母音と半母音は区別がつかない。伝統的には半母音は音節の核母音に先行する場合 rising diphthong または onglide と呼ばれる一方で、核母音の後に続く場合には falling glide または offglide と呼ばれて区別され、素性でも [syllabic] (例えば SPE など) や [vocalic] (Jakobson, et. al, 1952) などによって母音と区別されてきたが、ウェールズ語の場合母音か半母音かの区別は音素的なものというより音節内でどの位置を占めるかという構造的な違いであると考えられる。例えば *braith* 'speckled', *haul* 'sun', *diod* 'drink', *gwas* 'manservant' は、それぞれおおよそ次のような音節構造を持つと考えられるが、場合によっては複数の構造があてはまり、その結果母音にも子音にも解釈できる。



(a) は音節核が [ay] [aw] で offglide, (b) では [y] [w] は音節頭子音で onglide になる。ただし *guas* や *diod* は 2 音節語 ([gu:as], [di:od]) としても、単音節等語 ([gwas], [dyo:d]) としても、どちらの発音も可能で、同じように *deuad* 'dyad' などでは半母音は 2 重母音の渡りと頭子音ともとれる ([de: yad] vs. [dey. ad])。この違いは直接音節構造に関わるわけで、次にみるように強勢規則や長母音化規則との関連でも重要である。ちなみに *hwyad* 'ducks' のような語も次のような複数の音節構造を設定することが可能である。



3 長母音の分布

2重母音を除く長母音の分布は非常に限られている。長母音は予測不可能なものと、生起条件がかなり規則的なものに分けることができる。前者は例外的な語彙として、つづり上直接長音記号⁶⁾を付して長音であることが示される。このような語彙ほとんどが[l, n, r]のいずれかで終わる単音節語であるが、若干の語彙は短母音を持つ語彙と対立をなす。このような理由から(3)に示したように、ウェールズ語では通常母音の長短が示差的とされる。若干の例を(7)に示しておく。

(7)	ba:n	'crow'	bran	'bran'
	bro:n	'brown'	brɔ:n	'almost'
	ti:r	'land'	bɪr (<i>byr</i>)	'short'
	du:r	'water'	tɔ:r	'crowd'
	me:l	'honey'	fɛl	'like'

このような、母音の長短が予測できない例についての扱いについては後に述べるとして、まず先に予測可能な場合について見てみる。母音の長短については一般の文法書では次のように説明されることが多い。

(8) a. 単音節語でしかも開音節の母音は長い;

da: 'good' de: 'south' di: 'you' (fam.)

b. ただし同じ条件でも次のような1母音からなる語の場合は短い;

a 'and' ɛ 'he, him' ɪ 'to' ɔ 'from' ə 'the'

c. 閉音節で [b, d, g, f, θ, χ, s, v, ð] で終わる語の母音は長い;

ta:d 'father' bra:v 'fine' mi:s 'month'
ne:b 'no one' be:θ 'what' hu:χ 'sow'

d. 閉音節でも(c)以外の子音 [p, t, k, m, ŋ] で終わる場合母音は短い;

map 'map' het 'hat' klek 'gossip'
dɪm 'no' tʃɔŋ 'ship'

e. 単音節で2個以上の子音が続く場合母音は短い;

nant 'brook' pɛrθ 'hedge' trist 'sad'
bɔ:rθ 'table'

f. n, l, rの前では原則として母音は短い。ただし i, u でつづられる [i] に /n, l, r/ が続く場合には母音は長い;

(9) dan 'Dan' ar 'on' gwi:n 'wine' pi:l (*pur*) 'pure'

(f)の条件について一言付け加えると、ウェールズ語では [i, ɪ] の音はつづり字では *i, u, y* の3つの文字で表されるがこの内 *y* で表される音は最終音節とそれ以外の位置で [ə]-[ɜ] (またはその長音形) の交替がおこる。ところが *i, u* でつづられる [i:, ɪ] 音にはこのような交替はみられず、また最終音節にも起こることができる。従って最終音節の [n, l, r] の前では [i:, ɪ] しか起こらない

ことになる。単音節の /n, l, r/ の前では [ə] は短いということである。多音節等についての説明は一般文法書などではあまりなされていないが、例えば Jones (1977) では、「単音節語で長い母音は別の単音節の接辞が付加されると単音節語の場合よりやや短いのが通常の短母音よりもやや長い母音 (medium length) になる」と説明されている。これからすると音声学的には3段階の長さが認められることになるが、以下にみるように音韻論的にはこれは2段階、つまり長短の区別を認めれば十分である。

4 ウェールズ語の強勢

多音節語で長母音が現れる位置は若干の例外をのぞいて penultimate に限られる。しかしながらこの長音化を単に位置的な条件によってのみ引き起こされる現象であると結論づけることはできない。というのは長母音が現れる位置は強勢を受ける位置と密接な関係を持つからである。具体的には強勢のない音節では長母音はみられないということがある。従って、長母音は強勢の置かれた音節にのみ現れることから、基本的には母音の長音化は強勢付与に付随する現象と考えられる。ところがこのことからすぐにすべての長音化が強勢に伴う余剰的な特徴である、とはいえない。というのは強勢がある音節の母音が必ず長いかといえばそうではなく、今上でみたような分節素に関わる条件によっては強勢を持ちながら短母音である音節もあるからである。

まずウェールズ語の強勢についてみると、この言語の強勢規則は非常に単純である。多音節語については語末から2番目、つまり penultimate に強勢が置かれる。単音節語を考慮にいれば、語末より最大2音節までで一番左端の音節に強勢が置かれる、と言える。通常の発話では第2強勢や第3強勢など強勢の段階は認められず、結局強勢付与に関しては語末2音節間のフットだけが問題となる。⁷⁾

- | | | | | |
|------|---------|-------------|-------------|-------------------|
| (10) | dánngos | 'to show' | barlísín | 'grain of barley' |
| | egíno | 'to sprout' | pasíbilrwið | 'possibility, |

音母音化が強勢とは独立した現象と考えられないのは、例えば次のような、強勢規則の例外となる語についてもやはり長母音化は penultimate ではなく、強勢を受ける音節に起こるからである。

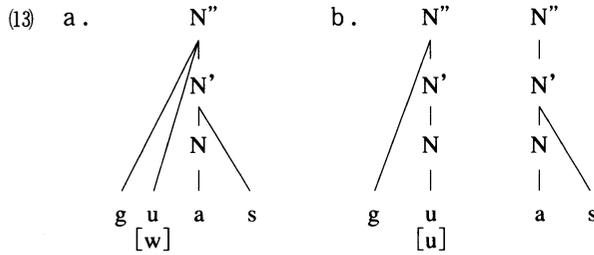
- | | | | | |
|------|--------|--------|--------|---------------|
| (11) | peŋlín | 'knee' | maŋí: | 'grandmother' |
| | imhé:t | 'far' | ıwχbén | 'above' |

強勢位置は語彙によって固定されているものではないので接尾辞がついたり母音が消去されたりするとそれにともなって自動的に強勢も移動する。

- | | | | | |
|------|-------|----------|---------|-------------|
| (12) | ó:ged | 'harrow' | ogé:di | 'harrows' |
| | gáir | 'word' | géyryaw | geyryádur |
| | | | | geyryadúron |

penultimate に強勢を持たない例外的な語彙については、つづりにあらかじめ強勢マークをつけて示される。また(5)で示したような複数の音節構造を構成するような音素列に対しては当然その音節構造にみあった強勢が付与される。次の例では(a)の場合は /u/ は半母音で子音として扱われるのに対して、(b)の場合は /u/ /a/ 共にそれぞれの音節の核となるので、その場合、

penultimate の音節に強勢を受ける。



5 重音節化規則

さて長音化問題であるが、基本的には強勢を持つことが必要条件となるので、多音節語については後ろから第2音節のみが問題となる。いいかえれば、第2音節より前にある母音は、母音消去などの規則が適用されることによってさらに右に移る可能性のない限り長音になることは決してないわけである。従って、常識的には長母音は基本的に音韻規則で導き、基底では短母音のみ認めればよいことになる。このように考えた場合の問題点の一つは母音の長短だけで対立する語や同じ環境で長短両方の母音が現れる場合の取り扱いをどうするかである。

(14) a.	tan	'until'	ta:n	'fire'
	man	'place'	ma:n	'small'
	gem	'jewel'	ge:m	'game'
	tal	'tall'	ta:l	'forehead'
b.	mí:mid	'minute'	kíno	'dinner'
	é:nu	'name'	'eni t̪'	'to win'
	patrú:ne	'patterns'	kɔ̃nid	'kindling'

(14 a) は短音節語、(14 b) は多音節語の例であるが、このような対立がみられる故に通常は(3)であげたように長母音が音素として設定されるわけである。しかしながら基本的には長母音は語末の2音節にしか現れないという「特異性」かつそれ以外の音節に長母音があればなんらかの意味で「非ウェールズ語」的なものであるというネイティブスピーカーの直感があり、これを明示的に示すためには短母音のみを基底形として設定するほうが適当である。

ウェールズ語に外来語として入って来る場合、英語からの語彙が圧倒的に多いわけであるが、この場合はもとの語彙に長母音や二重母音が含まれていればウェールズ語でも長母音になることが多く、ウェールズ語本来の語と対立することもある。もとの語彙のどの特徴を残すかについては強勢についてもいえることで、penultimate 以外の位置に強勢を置いたまま借用されることもしばしばあるが、このような場合、強勢は「借用語」としての「マーク」付けの機能をはたすといえる。

先にも述べたように表層音声レベルでは強勢が2箇所置かれることはないが、特殊な場合には例外的にこのようなことが起こる場合もある。例えば北ウェールズ方言の隠語に、文字通りの逆読みではないが「逆読み」(Backslang)と呼ばれるものがある。¹⁰⁾

- (15) brá:v → á:vbrá: ‘fine’
 plánt → á:ntplá: ‘children’
 páneđ → á:neđpá: ‘cupful’

この場合の長母音の現れる環境はもとの語単位で考える場合と一致し、結局この逆読み規則は本来の語にあらかじめ強勢および長音化規則が適用された後で適用される、postlexical な語形成規則といえる。従って強勢付与にしろ母音の長音化にしろ、逆読み語ではウェールズ語の表層での phonotactic な制約に違反した音声形が派生されるわけであるが、逆にこれによってネイティブスピーカーとしては「合成語」として他の辞書的な語や通常の派生語句とは異なる、「特殊語」としての範疇としてとらえることが可能になると考えられる。

多少横道にそれたので本来の強勢、長音化現象の話題にもどれば、問題は強勢が置かれながら長音化しない場合をどう説明するかにあったが、単音節語と多音節語では長母音が起こる環境が多少異なる。単音節語と多音節語での長音化にかかわる分節素条件と音節条件—つまりどのような分節素が続くかという条件と子音結合が起こるか否かという条件—をまとめると次のようになる。

(16)

	C ₀	C ₁							C ₂
		閉鎖音		摩擦音			流音	鼻音	
		有声	無声	有声	f/θ/χ	s/ʃ			
語末	L	L	S	L	L	L	S/L	S/L	S
Penul.	L	L	S	L	L	S	S/L	S/L	S

(C=子音, L=長, S=短)

- (17) no:s ‘night’ me:sir ‘measure’
 gwe:ʃ ‘better’ lasog ‘gizzard’
 ki:ʃ ‘hazel’ di:ʃad ‘clothes’

(17)は単音節と多音節では /s/, /ʃ/ の前で母音の長短が異なる例を示したものである。このように無声閉鎖音と複数の子音列の前では多音節語でも常に短いなど、/s/ /ʃ/ が後続する場合は除いては語末と penultimate では条件がほぼ同じであることがわかる。従ってこの長音化現象は位置にかかわらず同じ条件で起こる現象とみなすことができる。では両者に共通する条件としてはどのようなものを考えればいいであろうか？ まず子音群についての条件を考えてみる。どちらの場合も子音が連続する場合には短母音しか現れないが、今この条件を音節を単位にして考えてみると penultimate では重音節 (C)VC、語尾では超重音節 (C)VCC であることがわかる。ところがここで語末の子音を extrametrical と考えると、この条件はともに重音節となるばかりでなく、同じように penultimate の開音節と語末の閉音節 (C)VC を同じ開音節として扱うことが可能になる。この両者の平行性を示すと次のようになる。

- (18) 元の音節構造

penultimate	語末	extrametrical 規則の 適用後
C ₀ V.VX	C ₀ V#	C ₀ V

C ₀ V.CX	C ₀ VC#	C ₀ V
C ₀ VC.CX	C ₀ VCC#	C ₀ VC

従ってウェールズ語について次のような extrametrical 規則を設ける¹¹⁾。

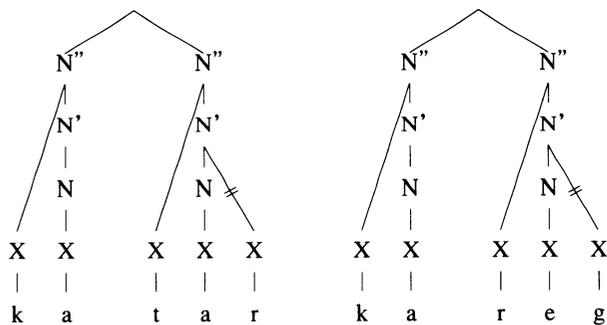
(19) C → [extrametrical] /]

このように考えると基本的にはウェールズ語の長音化は強勢を持つ開音節母音の長音化という極めて自然な現象としてとらえることができる。ところが先にみたようにこの長音化現象は直ぐ後ろに続く子音の種類によって影響を受ける。ただ繰り返しというようにこの長音化は強勢にともなう限られた位置での現象であるので、長音化は分節素の中身（つまり音素を構成する素性）に関わる現象とは別に独立した現象と考えたい。つまりウェールズ語における長音化は基本的には timing slot コアに関わる音韻過程で、分節素条件とは切り離して考える。このような仮定に立てば長音化規則は次のようになる。

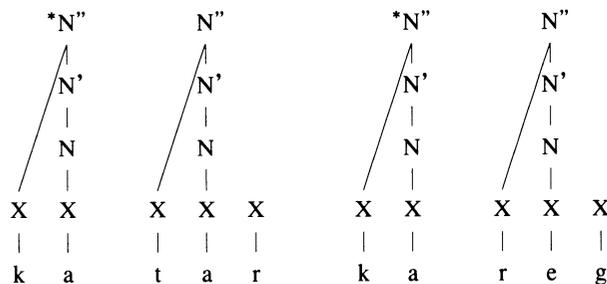
(20)
$$\begin{array}{ccc} \text{N}' & & \text{N}' \\ | & & | \\ *N & \rightarrow & *N \\ | & & / \backslash \\ X & & X \quad X \end{array}$$
 (N は音節核, * は強勢を持つことを示す)

この規則を用いれば例えば [mí:nid] 'minute', [górmod] 'too much', [tá:d] 'father', [pínt] 'pond' の派生は次のようになる。

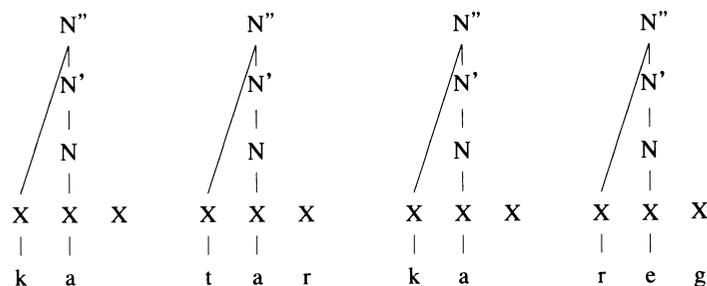
(21)



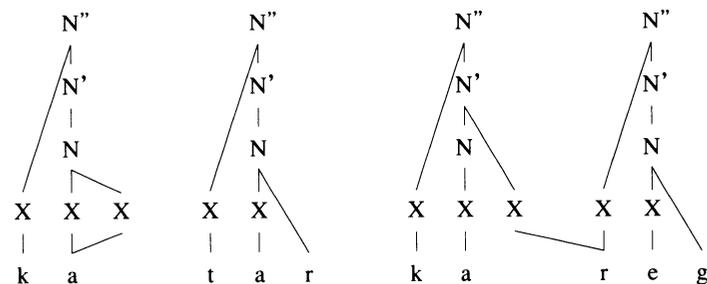
規則(19)



規則(21)



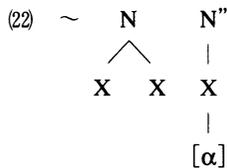
規則(23)



規則(24/25)

これで音節構造にかかわる長音化は統一的に説明できるが、残る問題は音素に関わる条件とどのように折り合いをつけるかである。(20)の規則は本来のもので、extrametrical 規則の適用の結果得られたものであり、開音節であればすべてその母音を長音化するので、適切な音声形を得るためには分節素に関わる条件は逆に無声閉鎖音などの前の長母音を短音化する規則を新たに設けるか、または規則適用に関して適用条件を設ける(基底構造を別の形にするなども含めて)か、いずれかの手立てが必要となる。

まず penultimate の条件を考えてみると、開音節で次の音節の頭子音が無声閉鎖音, [s], [t], の場合原則として短母音が生じ、特定の語彙で [n], [l], [r] の場合にも同様になるわけであるが、音声学的にいてこのような環境で短母音化がおこるとは考えにくいので、結局この分節素は強勢をもつ開音節の長母音化を阻止する条件となると考えることにする。無声閉鎖音はそれ自身自然類をなすが [s], [t], [n], [l], [r] は自然類をなさない。しかし [θ] が含まれないことを考えるとすべて歯茎音 (dental alveolars) ということになる。このことから、条件としていわゆる 'coronal syndrome' のことが想起されるが、閉鎖音 ([t] [d]) は対象外のこともあり、ここでは 'α' としてこの類を指定しておくにとどめる。この長母音化の条件とはならない無声閉鎖音などは、いいかえれば、どのような環境でも常に短母音が先行するというので、結局



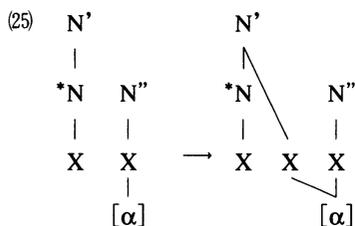
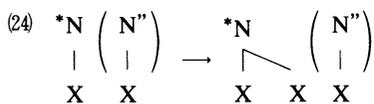
という否定の条件を設定しておけば長音化の規則も、自動的に適用されないことになる。

次に単音節語の場合を考えてみる。複数の子音で終わる場合には、母音のすぐ後の子音が何であろうと長母音化は起こらず、音節構造が分節素の中身に優先する。一方1個の子音で終わる場合は分節素の種類が問題になる。ただ単音節の場合、語末の子音が extrametrical 規則の対象になるので、特に子音が1個の場合の扱い方をどうするかがひとつのカギになる。今まで述べたように、ここでは長音化を基本的には音節構造を条件とする音韻変化であると考え、分節素の条件とは別と考えている。オートセグメンタル理論では、この両者がまったく異なるティアを構成する。従って、この構造表示方法を用いれば、上記の異なる条件も、形式的にもまったく異なったレベルでの条件として扱うことができる。

この長音化については実はもう一点重要な現象がみられる。それは強勢が置かれる音節の母音が長音化されない場合には後続する子音が多少長音化されるというものである。

(23) ár:eg 'stone' ám:ser 'time'

このことを考慮にいれば、強勢付与は単なる母音の長音化を引き起こす現象ではなく、タイ

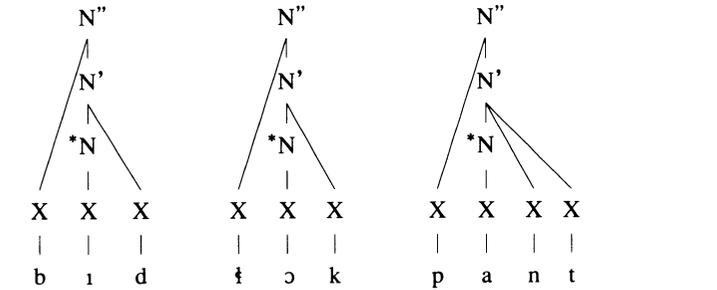


(ただし [α] = 歯茎硬口蓋音と無声閉鎖音)

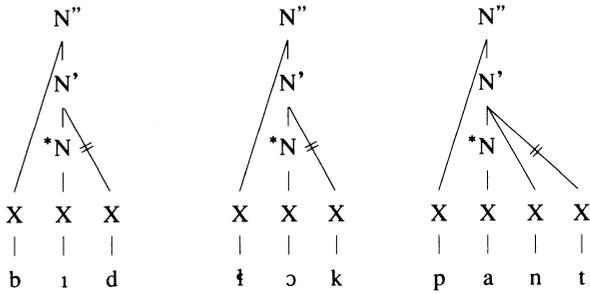
ミングスロットに新たに分節素を挿入することで開音節を重音節に変える規則の適用を引き起こす規則と考えるとうまく説明がつく。つまり、この新たに加えられた分節素が音節核に加えられると長母音が生じ、歯茎音や無声閉鎖音が続くとその後続の頭子音に加えられる、と考えるわけである。この重音節化規則は次の長母音化規則 (24) と長子音化規則 (25) のようにあらわせる。

この後、新たに挿入された X が音節核 N に支配されている場合には自動的に同じ核の音素にリンクされ、音節尾子音の N' 節点にある場合には後続の子音 (次の音節の頭子音 N'') の音素に連結される。また語尾においては子音の長音化は観察されていないが、これは (C)VC の音節構造を持つ場合 extrametrical 規則によって一時的に開音節として扱われるため、(19) の規則の適用対

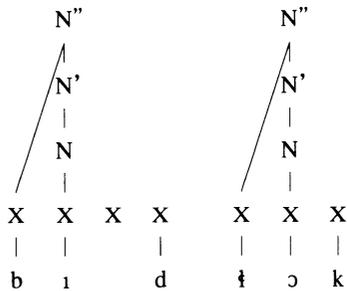
(26) bi:d 'world' tɔ:k 'sheepfold' pant 'valley'



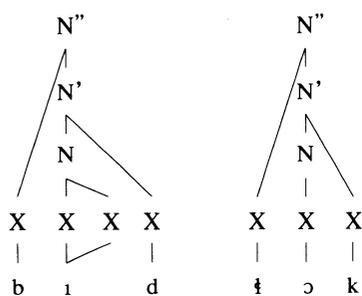
規則(19)



規則(24)



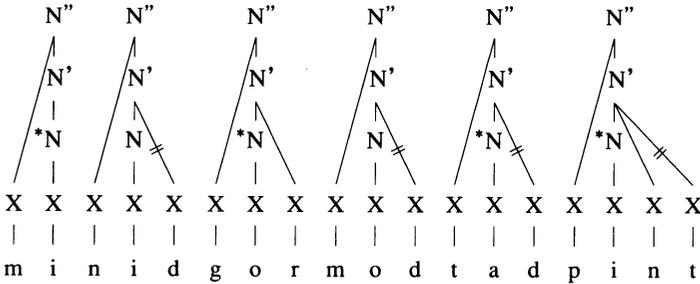
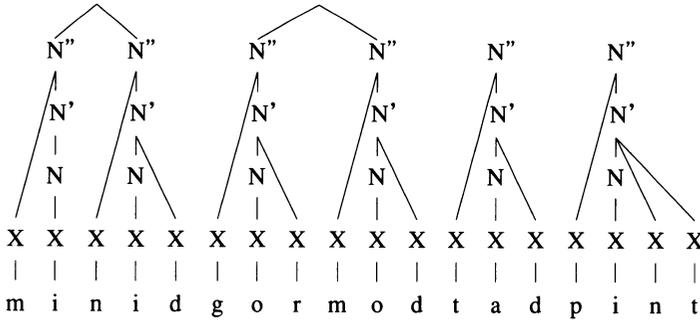
規則(25) / 他の規則



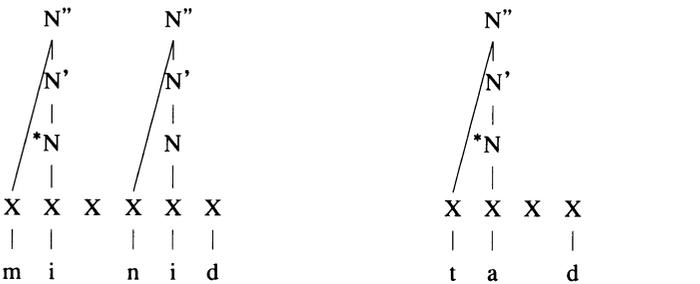
象から除外されることで説明がつく ((C)VCC の音節構造を持つ場合はもともと 'X' が挿入されない)。ただしメロディーティアについては隣接して音素があるので規則 (2) の適用条件に関係する。

以上の規則に基づけば例えば [ká:tar] 'chair', [ká:reg] 'stone' の派生は次のようになる。

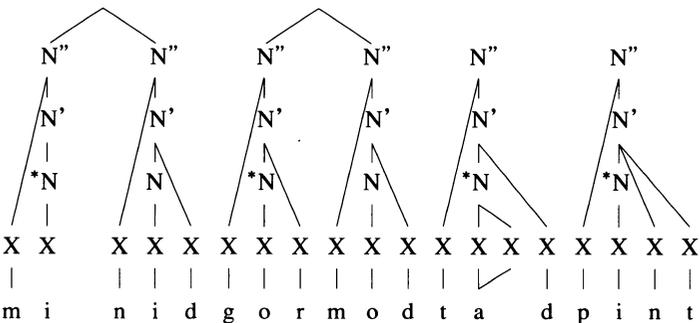
(27) ká:tar 'chair' ká:reg 'stone'



規則(19)



規則(21)



規則(24, 25)

6 結 語

ウェールズ語の母音の長音化現象は、強勢の置かれた音節の核母音が長くなる現象であるが、後続する子音の種類によってはこの変化は起こらない。この小論では主に、この母音の長音化現象は強勢付与にともなう重音節化現象の一つで、基本的にはタイミングスロットに関わる変化としてとらえられること。その際、分節素条件はメロディースロット上の否定制約として文法で述べておけば、長音化規則がより一般的なかたちで簡潔に表すことができること、またこの長音化は語尾と後ろから2番目の音節で起こるが、extrametrical 規則を考えることで、統一的に説明できること、などを示した。さらにこのような説明には、オートセグメンタル理論の枠組みが都合がいいことも同時に論じた。

注

1. Chomsky and Halle (1968).
2. ただし方言によって /raytr/, /raydr/ 両方ともに [rá:yDr] と発音され、この場合には長音化規則と弾音化規則が逆の順序で適用されると考えられる。この2つの規則は概略次のようにあらわせる。
 - a. $V \rightarrow V: / _ [+ \text{Voice}]$
 - b. $\left\{ \begin{array}{l} t \\ d \end{array} \right\} \rightarrow [D] / _ \check{V} (\check{V} \text{ は無強勢})$
3. ウェールズ語はインド・ヨーロッパ語族の1系統である Italo-Celtic 語族に属する言語で、この中のケルト語族は大きく2つのグループに分けられる。一つはゴイデリック (Goidelic または Q 言語) と呼ばれるグループで、Irish, Scots Gaelic, Manx などの言語からなり、もう一つのグループはブリトニック (Brythonic または P 言語) と呼ばれ、これには Welsh, Cornish, Breton の各言語がある。Cornish 語はすでに18世紀には話されなくなってしまったが、その他の言語も衰退の一途にある。ただウェールズ語やアイルランド語などは、近年の民族的な復興運動や教育省をはじめとする諸行政機関の支援政策が効を奏して衰退傾向に一定歯止めがかかったようにも見えるが、なお事態は流動的な状態にある。ウェールズ語の音声、音韻現象上顕著な特徴としてはケルト語一般にも見られる語頭のミュートーション現象があるが、それ以外にはあまりウェールズ語固有のきわだった音韻上の特徴というものはない。
4. [t̪] はウェールズ語特有の音で無声、摩擦音である。/l/ は常に「明るいl」であるが、語頭で無声子音に続く場合にはやや無声化される。/r/ はウェールズ語では roll か flap であるが、歯茎閉鎖音の後では摩擦音となる ([d.ɪu:d] 'dear', [t.ɪak] 'track')。また語頭では無声で気音化された [ɾ] が異音として現れることがあるが、語中、語尾では有声音のみみられる。[j] は前高母音 /i/ の前のみ現れ [s] と相補分布をなす。破裂音の /p, t, k/ は語頭では強い氣息を伴うのに対して /b, d, g/ は有聲氣息音で母音間を除いては半有聲音であるがしばしば完全に無声化される。この他に英語からの借用音として /tʃ/ /dʒ/ /z/ がある。
5. この質的な違いは通常舌の緊張度の差によって「張り母音 (tense vowels)」と「緩み母音 (lax vowels)」とに分かれ、以前は [tense] という素性によって区別されていたが、舌の緊張が舌根から前方に引っ張られることによって起こるので最近では [ATR] (advancement of the tongue root) という素性が使われることが多い。英語やウェールズ語だけでなく多くのアフリカの言語にも見られる音声特徴である。
6. ただしこれは南部方言の場合で、北部方言の場合には 'u' 'y' でつづられる音は [ɪ] か [i:] である。ま

た'y'でつづられる音は後ろから第2音節より前に来る場合[s]の音になる。

7. パラメータ式に言えばフットは initial prominence。ただしバイナリーで右から左ヘフットを作っても最終的には右端のヘッドを残して消去することになる。
8. ただしこの例では次にふれる強勢や母音の長短の表示は省いている。
9. 方言によっては[s:]が現れる場合もある。
10. この Backslang のデータは Awbery (1987) による。これは形式的には音節の概念を使えば簡潔に記述できる。つまり韻 (Rhyme) から後の部分 (前子音を除いた部分) に後子音を除いた部分を付加することで作ることができる。

音節構造は通常核の前の前子音 (Onset) と、核 (Nucleus), 後子音 (Offset) からなる韻 (Rhyme) というように枝分かれ構造を持つと考えられる。これは韻が一つの単位として機能するということで、逆にいえば頭子音と核が単位となって機能することはないということである。ところがウェールズ語のこの「逆読み」では核を中心として前の部分、つまり頭子音と、後ろの尾子音と両方の結びつきが一つの単位となっている例で、音節構造を考える上で非常に興味深い。

11. 音節構造でいえば、語末の N' の最後の要素を [extrametrical] にする規則である。

参考文献

- Awbery, Gwennlian M. 1984. Phonotactic constraints in Welsh. In *Welsh Phonology*, Ball, M. J. and G. E. Jones eds, Cardiff University of Wales Press.
- Awbery, Gwennlian M. 1987. Secret language in North Wales. *Papurau Gwaith Ieithyddol Cymraeg Caerdydd (Cardiff Working Papers in Linguistics)* 5 : 1-23. National Museum of Wales (Welsh Folk Museum) and University College Cardiff.
- Ball, Martin J. 1984. Phonetics for phonology. In *Welsh Phonology*, Ball, M. J. and G. E. Jones eds. Cardiff University of Wales Press.
- Chomsky, Noam and Morris Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*, Harper and Row.
- Evans, E. Meurig. 1992. *Welsh-English English-Welsh Dictionary*. Hippocrene Books.
- Hayes, Bruce. 1979. Extrametricality. *MIT Working Papers in Linguistics* 1 : 77-86.
- Harris, Jone. 1994. *English Sound Structure*. Blackwell.
- Jakobson, Roman, Gunnar Fant, and Morris Halle. 1952. *Preliminaries to Speech Analysis*. MIT Press.
- Jones, T. I. Rhys. 1977. *Living Welsh*. Teach Yourself Books.
- Jones, T. J. Rhys. 1992. *Welsh*. (Teach Yourself Books) NTC Publishing group.
- Kenstowicz, Michael. 1994. *Phonology in Generative Grammar*. Blackwell.
- King, Gareth. 1993. *Modern Welsh*. Routledge.
- Prince, Alan S. 1980. A metrical theory for Estonian quantity. *Linguistic Inquiry* 11 : 511-562.

(立命館大学国際関係学部教授)